

たった一人の「電波戦争」 志布志から米軍謀略放送に挑戦

昭和19年6月にサイパン島が占領されると、日本向けの敵性謀略放送が、12月下旬からはっきりと聞こえるようになった。かねてからこの事態を予測していた日本放送協会は、国内各地に雑音放送機(予備放送機使用)を設置し、妨害電波を発射する準備を進めていた。九州では熊本・福岡・宮崎・鹿児島・延岡・志布志の6カ所が発信地として選ばれ、音源としては、録音盤の溝に針を滑らせて引き起こす針雑音や自動発振機が使われたが、どの方式にも一長一短があり、結局、大勢の人が騒ぐ声を混ぜ合わせたノイズがいちばん効果があることがわかり、録音盤が本部から支給されるようになる。しかし一回の再生時間はわずか3分間ほど。担当者にとっては、繰り返し再生する手間が大変で、のちには輪ゴムと割り箸を使った簡単な反復再生装置が発明され、珍重されたという。

福岡放送局ではこの雑音放送を局舎の裏に置いた放送自動車から行った。この自動車は、放送車と電源車を一組とする非常放送用のもので、出力1キロワット。当初は全国の中央放送局に配備される予定だったが、昭和20年までに東京・大阪・名古屋・福岡の4局に配置されただけ。しかも肝心の電源車が配備されなかったため、使用する時は他から受電しなければならないという、とても非常用とは言えないしろものだった。

このいわゆる「敵性放送阻止作戦」を、4カ月余にわたって一人で遂行した人がいる。福岡で定年を迎えた牧野豊さんだ。以下はその思い出話である。

「私は昭和19年に協会に入ったあと、東京で1年間の予定の技術員養成研修を受けていました。ところが年が明けると、人手不足という理由で突然研修が中止となり、熊本局へ呼びもどされ、20年4月から鹿児島県志布志町の雑音放送送信所へ行くよう命じられました。職員はたった1人で、交替要員もいないとのこと。少々気落ちして、現地に赴任してみますと、郵便局裏の空き家の1階コンクリートの土間に、長方形の机があり、その上に出力50ワットの放送機と、雑音発生機、モニター用ラジオが置いてありました。外にはアンテナ用の木柱が1本、これが送信所のすべてでした。

謀略放送は、最初は午後10時から午前1時頃までだったのが、まもなく午後6時から始まり、翌朝7時頃まで続くようになりました。この放送は中波で、周波数はほぼ1000キロサイクル。出力も大きく、場所によっては国内放送よりずっと鮮明に聞こえるほどでした。私の仕事は毎夕、サイパン放送開始前の数分間に発射される電波を正確に把握し、それとまったく同一周波数の雑音放送を、定刻の午後6時に発射することから始まります。しかし時には、相手が電波の周波数をずらしたり、開始時間を早めたりすることもあり、油断は絶対禁物でした。雑音電波の送出は連日翌朝7時頃まで続くのですから、私自身着かたといえ、よくぞ体がもったものだと思います。

志布志湾は軍艦も楽に入れるほどの水深があり、日本の軍部は、米軍の主力がここに上陸してくるものと想定していました。このため、町の背後の山には縦横にトンネルが掘られ、日本一といわれる陣地が構築されていたほか、鹿屋の航空隊基地にも近かったため、憲兵隊が常駐していました。ある日私が、レーザーをかけて波長を探っていたところ、表のガラス戸越しに私の姿を見た一人の憲兵が、怪しい奴とばかり突然踏み込んできました。びっくり仰天して、自分はスパイなどではないことを必死で説明し、危うく難を免れましたが、あとでその人物が、私の故郷のすぐ近くの出身であることがわかり、それが縁で、戦後まで長い付き合いが続きました。

志布志湾は、日本本土へのB29の侵入口になっていたのか、連日のように姿を見せましたし、グラマン艦載機が町に機銃掃射を浴びせることもあり、そのたびに、裏山の防空壕に逃げ込んだものです。今にして思えば、たった一人で、休日もない旅館住まいの日々は、とても辛いものでした。しかし、自分はアメリカ相手に戦っているのだという気負いみたいなものがあり、若さも手伝ってがんばり通せました。今では懐かしい思い出です」

牧野さんは、残務整理のため、終戦後も9月まで志布志に残留、やっと帰任してみると、実家は戦災で跡形も無くなっていたという。